

ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年記念講演会

講演集

建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ

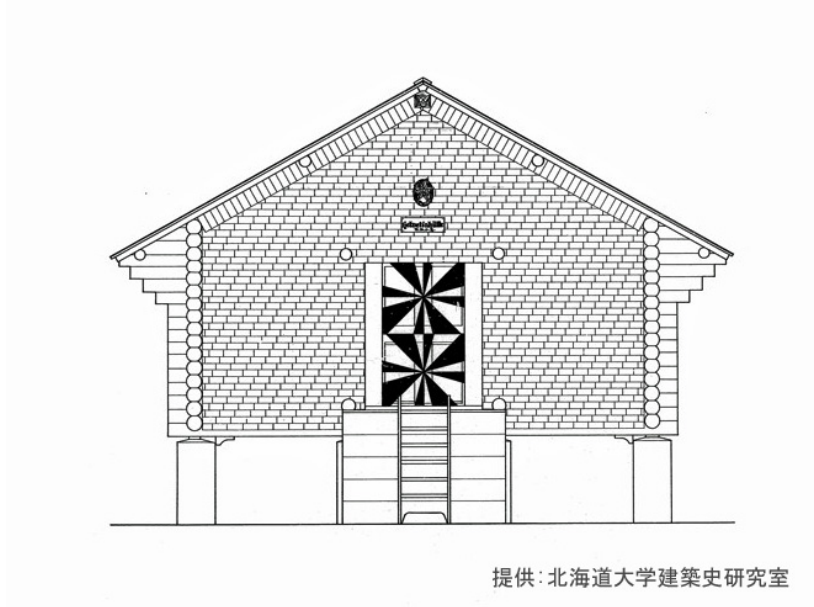
講師 角幸博北大名誉教授



北大山岳館編

2012年6月

紙絵：アーノルド・グブラー先生が故郷スイスに建てた山小屋“第二ヘルヴェチアヒュッテ”の壁に掛けられている板絵。同じデザインの板絵が山崎英雄氏も所蔵しており、両方とも KK のサインがある。KK はヘルヴェチアヒュッテの宿帳から 1935(昭和 10)年北大農学部農学科卒業でスキー部員だった黒住久弥氏と推定される。



提供：北海道大学建築史研究室

講演集「建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ」 はじめに

4月28日、北大ファカルティ・ハウス“エンレイソウ”で、北大山岳部・山の会主催の「ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年記念祝賀会」が開催された。祝賀会にはヒュッテ生みの親の1人であるアーノルド・グブラー氏の御子息ベルンハルト・グブラー御夫妻が出席され、参集した部員、会員ら六拾余名と共にヒュッテ八十五周年を盛大に祝った。

祝賀会の冒頭に建築史がご専門の角幸博北大名誉教授に「建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ」のテーマで講演をしていただいたが、この講演集はそれをまとめたものである。

ヘルヴェチアヒュッテの建設者、山崎春雄、アーノルド・グブラー、マックス・ヒンデルの三氏のうち、ヒンデルについては他の二氏と比べて情報が少なく、AACHの関係者のほとんどが、“ヒュッテを設計した人”程度の知識しか持ち合わせておらず、彼の設計した作品やその生涯については詳細を知らない。

祝賀会の幹事を努めた北大山岳館運営委員会は、ヒュッテ八十五周年という機会に、マックス・ヒンデルについて学ぶことは意義のあることと考え、道内の歴史的建造物の保存・修復とその啓発に努めて来られ、また、マックス・ヒンデルの研究者でもある角幸博先生に表題の講演をお願いした。

祝賀会の冒頭のわずか30分という短い時間ではあったが、先生の軽快で楽しい語り口と豊富な画像に参加者は身を乗り出して聞き入り、ヒンデルという人物をよく知ることができ、ヘルヴェチアヒュッテへの愛着を一層深めることが出来た。

角先生は北大を退官されたばかりで、次の仕事(NPO法人歴史的地域資産研究機構)の立ち上げにお忙しい中、時間を割いていただき、ボランティアで講演を引き受けていただいた。心より感謝申し上げますと共に、今後も北大の山小屋保存のためにご指導をいただきますようお願い申し上げます。

日時：2012年4月28日午後5時～5時30分

会場：北大ファカルティ・ハウス“エンレイソウ”

主催：北大山岳館

講師：角幸博北大名誉教授

演題：建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ

ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年記念祝賀会幹事
中村晴彦、山田知充、石田隆雄、小野寺弘道

角幸博先生略歴

- 1963年 北海道立札幌南高等学校入学
1966年 北海道大学理類入学
1967年 北海道大学建築工学部移行
1970年 同上卒業
北海道大学建築工学科助手
1995年 『マックス・ヒンデルと田上義也—大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究—』で博士（工学）取得
1997年 北海道大学大学院工学研究科助教授
2002年 同上教授
2010年 北海道大学大学院工学研究院教授（配置換）
2011年 同上退職
北海道大学名誉教授
北海道大学工学研究院特任教授
2012年 同上退職
現在 特定非営利活動法人「歴史的地域遺産研究機構」代表理事
札幌市文化財保護審議会会長
北海道文化財保護協会副会長
公益財団法人網走監獄保存財団顧問
北海道大学文書館研究員
専門 建築史意匠学
博士（工学）、一級建築士

主な著作

建築探訪シリーズ

『函館の建築探訪』（1997）、『札幌の建築探訪』（1998）、
『旭川と道北の建築探訪』（2000）、『道南・道央の建築探訪』（2004）、『道東の建築探訪』（2007）

『おたる西洋館（HTB まめほん 32）』（1978）、『さっぽろ文庫 23 札幌の建物』（1982）、『北の建物』（1984）、『歴史と建物の散歩道～北海道の文化財から～（HTB まめほん 56）』（1994）、

『再生名建築 時を超えるデザイン I』（2009）、『再生名住宅時を超えるデザイン II』（2009） ほか多数



建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ

まだ明るいのですが、こんばんは。いま、ご紹介いただきました角と申します。
3月に41年半の大学生活を終えまして、悠々自適のつもりだったのですが意外に毎日が忙しくて、そういう意味ではなかなか思うように好きな研究ができない状況です。

きょう与えられたタイトルは、「建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ」ということですが、私自身、ヒンデルのお墓参りにも行きましたし、マックス・ヒンデルという人が、どういう仕事をして、どういうことをやったのか理解していますので、短い時間ですが彼の仕事の全容をお話したいと思います。

図—1 マックス・ヒンデル MAX HINDER
(1887~1963)



図—1 マックス・ヒンデル肖像

彼の札幌での最初の仕事が藤学園の校舎でしたが、その建前の時に写した写真です。前列中央に腕を組んでいるダンディな男がヒンデルです。

図-2 ヒンデル経歴 (1)

1887 (明治 20) 年 1 月 20 スイス・チューリッヒ (Fluntern の Zurichbergstrasse104) で誕生。3 人兄弟の長男。父ルドルフは社会福祉局上級公務員。母はエミリー・シェーネンベルガー
 Emile/Charlotte Louise(1891-1985)←のち Hans Koller 夫人
 1909 (明治 42) 年 Hans 誕生。Maria Brennwald 夫人他界 (1884-1909)
 1916 年 (29 歳) チューリッヒに設計事務所開設
 1924 年 1 月 マルセイユ出発 3 月横浜到着

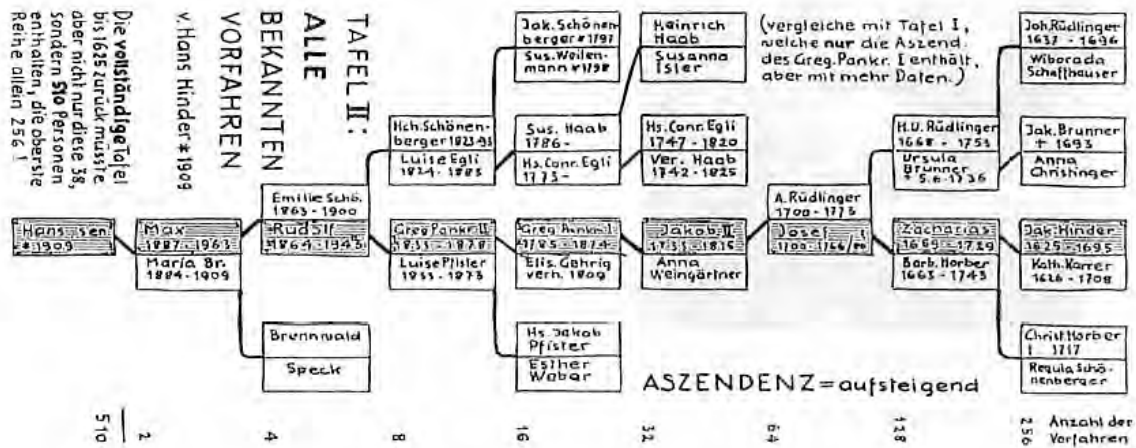


図 1 ヒンデル家家系図(ハンス・ヒンデル氏作成)

図-2 ヒンデル経歴(1)

1887 年 1 月 20 日に、スイスのチューリッヒで生まれました。今はチューリッヒ市内になっている地区で、フルンテルンのチューリッヒベルクシュトラッセというところに生家がありました。実際に今も通りの名がありまして、そこに生家を探しに行ってみりました。結局、どれがヒンデルさんの家だかわからなかったのですが。

彼は、三人兄弟の長男として生まれました。お母さんはエミリー・シェーネンベルガー、お父さんはルドルフです

1909 年、ヒンデルにハンスというに息子さんが誕生した翌年に、最初の奥さんマリアが亡くなり、その後 1916 年にチューリッヒに設計事務所を開設します。妹のルイーゼさんがそののち、北大のドイツ語教師になったハンス・コラーさんの奥様になられました。スイスと札幌はすごく気候が似ているということもあって、ヒンデルはこのハンス・コラー夫人の勧めで札幌に、北海道に来ることになり、1924 年、マルセイユを出発します。その船の中で北大医学部の柳壯一先生と偶然一緒になったというエピソードもありました (注：図-8 参照)。

図—3 ヒンデル経歴(2)

1925.1.29	Koller 死去、3月コラー夫人スイス帰国
1927.10(40y.)	横浜へ移転
1935(48y.)5.31	横浜事務所解散
1937	Die Tochter Des SAMURAI (新しき土) にドイツ語教師役として出演
1939.8.5	ヘルヴェチアヒュッテ行

図—3 ヒンデル経歴(2)

札幌で数年を過ごしたヒンデルは、一時は札幌で一生を過ごすことを決めていましたが、1925年に札幌に来る機会を作ったコラーさんが亡くなり、その年の3月にコラー未亡人がスイスに帰るということもあって、1927年10月にヒンデルも札幌を去り、横浜に移転します。

横浜の本牧満坂には事務所兼住宅が今も残っていて、現在は外国人の弁護士さんが住んでいます(注：図—22参照)。

しばらくそこを事務所にして設計活動を続けたのち、1935年にその事務所を解散し、1939年にヨーロッパに帰っていきます。

図—4 映画と Max Hinder

新しき土「Die Tochter des Samurai」(「侍の娘」)
日独合作映画。

1937年2月4日公開(日本) 1937年3月23日公開
(ドイツ)

アーノルド・ファンクと伊丹万作の共同監督で製作が計画されたが、両監督の対立でファンク版と伊丹版が撮影された。一般的に流通しているのはファンク版

キャスト

大和光子：原節子、大和輝雄：小杉勇、大和巖：早川雪舟ほか、ドイツ語教師：Max Hinder

映画の製作背景には、

日本とナチス・ドイツの政治的・軍事的接近の目論見
1936年2月8日 撮影隊に日独軍事協定締結交渉の
秘密使命を受けたフリードリヒ・ハックが同行、11
月25日日独防共協定締結



図-4 映画とマックス・ヒンデル

実はごく最近、横浜事務所の解散からヨーロッパに帰る間の1937年に、ヒンデルが「侍の娘」という映画にドイツ語教師役として出演していたことが分かりました。私もようやくDVDを手に入れて、今朝ももう一度見直してきたところです。

DVDでは、マックス・ヒンダーという名前で表記されています。それが正しい発音なのですが、ヒンデルの設計図にはわざわざカタカナでヒンデルと書いているものですから、私はそれにこだわってヒンデルと呼びます。でもDVDにはマックス・ヒンダーというふうに書いてあります。

これが原節子が主演をしているもので、1937年2月4日に日本で、3月23日にドイツで公開されています。日本とドイツの合作映画で、この監督のアーノルド・ファンクという人は、山を撮らせた一級という有名な監督なのですが、その方と伊丹万作両監督の共同ということで製作が計画されました。しかし、両監督がそれぞれわがままで折り合わず、最終的にはハンク版と伊丹版の二つが撮影されました。

中を見ますと東京のはずなのに阪神電車が走っていたり、大和家という大きな家のお嬢さんの話なのですが、どういうわけか巖島神社の鳥居が家の庭にあったりと、相当ひどいのですが、1930年代の日本の様子がよく分るので、映画のストーリーだけではなく、僕にとっては歴史的に興味深い映画でした。

キャストは、原節子が大和光子の役、大和巖が早川青洲、ドイツ語教師のところにマックス・ヒンダーの名前が出て来ます。

映画の製作は、ちょうどナチスが日本にアプローチしている頃で、日独防共協定が締結する時期です。それに合せて映画のために来日してきたスタッフの中にフリードリッヒ・ハンクという密命を受けた人も来日しているので、そういう時代背景もあったのだらうと思われま

図-5 ヒンデル経歴(3)

1940年離日後、シベリア経由でベルリンに渡る。

1941～45年 ベルリンに滞在后、ドレスデングループをベルリンからチューリッヒに連れて行く途中で、チェコ国境近くで空襲に会い、2番目の妻 Leni Hinder を1945年7月9日 Zwiesel の病院で失う。(Leni は、1906年12月6日生れ。1931年11月12日、ウィーンの Chrlottenburg で結婚)

1945年から Regen に居住

赤十字の最も活発なメンバーの1人として活動。Regen の Sclaraffia (1859年にプラハで設立されたドイツ語圏の音楽・芸術・文化グループ) の設立に奔走。

1950～52年、レーゲン職業学校(1948年設立) 校長

1959年12月28日 Margareta (1908年7月5日 Regen 郡 Soelden 生) と結婚

1960年 Siegfried Gaisbauer (1932年ミュンヘン生れ。1959年28歳で Regen に居住) と設計事務所 (Ing. Buero. S. GASDAUER) を設立。Hinder が死去するまでの3年間に、20～30のプロジェクトを手掛けたが、いずれも実現し

なかった。

1963年1月27日 Max Hinder 76歳で死去。重い喉頭がん

2003年9月23日 Margareta 夫人死去

図-5 ヒンデル経歴(3)

ヒンデルはこの後にベルリンに渡ることになります。ナチスの仕事を受けて日本で大きな展覧会をやることになり、そのために渡欧するのですが、その頃からドイツ・ナチスの、そしてヒトラーの力が弱くなっていき、ドイツが空襲を受けたりしたため、ドイツを迂回してスイスに帰ろうとします。そしてその途中、ツヴィーゼルで二番目の奥様を亡くされるということがありました。

この3年ほどの間に私が調べたところでは、ヒンデルは最後はレーゲンという街で亡くなっています。私はそこで、ヒンデルのことを知っている人たちにヒアリングをしました。

ヒンデルは、1940年にシベリアからベルリンに渡って、1941から1945年までベルリンに滞在していて、ここでナチスの広報部の仕事を請けていたらしい。そのあと空襲でドレスデングループを伴って、彼がベルリンからチューリッヒに連れてくる途中で、チェコ近くで空襲にあってレイニー・ヒンデルさんが、ツヴィーゼルという小さなドイツの町で亡くなっています。レイニーさんは、ヒンデルが日本にいる間の1931年にウィーンで結婚しているのですが、いきさつなど細かいことはわかりません。1945年に奥さんを亡くしてからヒンデルは、すぐ近くのレーゲンという街で最期まで過ごすこととなります。

レーゲンでヒンデルについて、いろいろ話を聞きました。シュララーフィアというドイツ語圏の文化グループがあるのですが、その設立に奔走したり、職業学校の校長を務めたりしていたということです。また、そのあとは、マーガレッタさんという人と結婚します。1959年には、ガイスバウアーさんという人と建築設計事務所を設立しています。私は、このガイスバウアーさんに3年前にお会いしました。耳が遠くなってなかなか話が通じないところもありましたが、それでもヒンデルのことはよく覚えておられました。28歳の時から3年間くらい、

ヒンデルと共に同じ事務所で仕事をしたということでした。

ヒンデルは1963年1月27日に76歳で亡くなりました。重い喉頭がんだったそうです。私は1990年頃に一度レーゲンに行きましたが、その当時、まだ妻のマーガレッタさんをご存命だったのです。それを知らずに墓参りだけして、それで満足して帰ってきてしまいました。その時にもう少し話を聞いていたらなあと後悔しています。

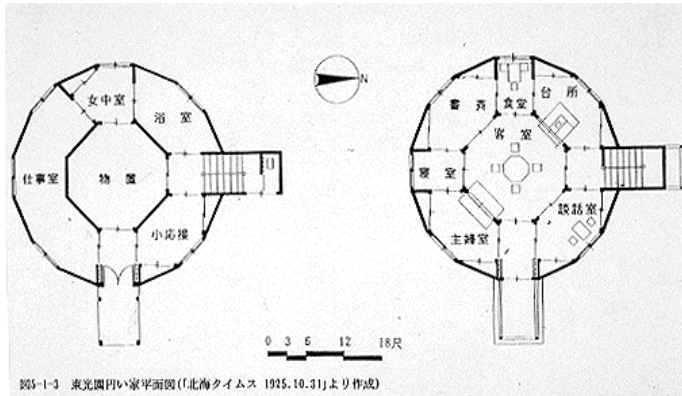
図一6 東光園円い家（1924年建設、1967年取壊し）



(a) 北側外観、1950年代



(b) 南側外観 右から二人目ヒンデル、三人目アニー夫人



(c) 平面図

1925年 Arnold Gubler
に売却
1928年 児玉作左衛門北
大医学部教授所有

図一6 東光園の円い家

ヒンデルがどういう作品を作っていたかということこれから説明します。

図一6が東光園の円い家という建築物です。実際には16角形の家で、真ん中に物置があって、そこがアトリエになっている住宅ですが、1925年にグブラーさんに売却したと言われていました。そして3年後に、北大の児玉先生が所有したと言われていました。

ちなみに、(b)の右から2番目にいるのがヒンデル。その右隣にいる方、私は奥さんだと思っていたのですが、実際にはこの方の戸籍がなくて、本当にそうかどうか分かりません。日本に来る時に一緒に来られた方で、アニーと云います。あとの人は書生さん、女中さん、ドラフトマンで彼らを雇っていたということが分っています。

細かな建物の説明をすると時間がありませんので省きます。

いろいろと不思議な点のある16角形の建物で、基本的には2階が生活スペースです。16角形ですから、小さな三角形のスペースがいくつかできるわけですが、そこを物置、収納スペースにします。でもこのスペースの意味はそれだけではなく、外気とそこでワンクッションできるものですから、そこがなるべく外気温を中に入れないための緩衝空間となっています。もう一つ、外側にシングル葺きといいますが、桎葺きをしています、その桎によって隙間風を防ぐという工夫もしています。

図一七 藤学園キノルド記念館（旧札幌藤高等女学校本館）



(a) 解体前の本館(1982年)

1924年9月28日上棟

設計：M. ヒンデル

施工：松川・三浦工務所

1932年2月出火3月末日復旧

1999年2月27日藤学園理事会 キノ
ルド記念館解体を決定



(b) 解体前の本館南面(1982年)



(d) 解体前の本館北面(1999年)



(c) 創建時の本館



(e) 解体前の本館西面(1982年)

図一七 藤学園キノルド記念館（旧札幌藤高等女学校本館）

ヒンデルの自邸を建てたあとの代表作としては、このキノルド記念館(旧藤高等女学校本館)があります。1932年に一度火事を出しましたが、翌月の三月末に復旧していました。ただ残念なことはヒンデルの代表作なので、これはぜひ後世に残すべきだと私は主張したのですが、1999年に藤学園の理事会が解体を決定しました。

しかし、藤にとってはいまもモニュメンタルな建物で、僕は保存に失敗しましたが、これと同じ形のレプリカが北16条校舎のところに再建されています。



(f) 玉ねぎ塔解体

2000年12月27日 解体工事着手の発表

2001年1月4日 玉ねぎ塔の切り離し準備

2001年1月5日～18日解体工事

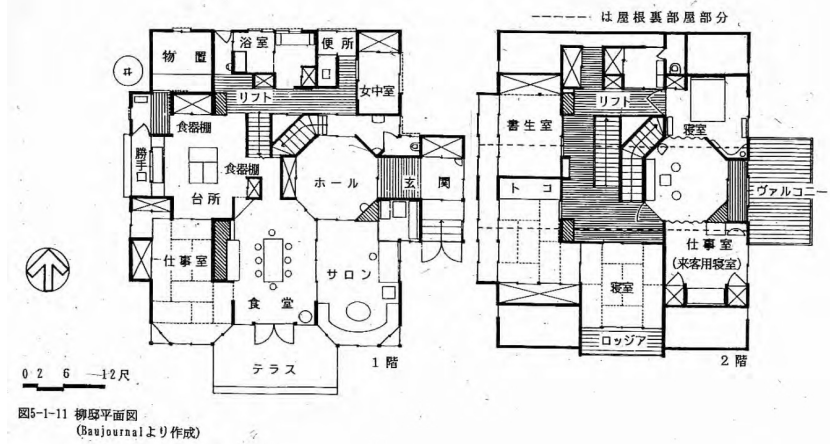


(g) 解体工事開始

建てられたときの状態は、(c) のようにフレアドルーフが特徴的でした。スイス地方のアパートなどの屋根は裾部分が緩勾配になっていますよね。こういう屋根をフレアドルーフといいます。

この建物は、2001年に解体されました。藤学園から私の研究室に実測調査と、それからもし再建するときにそれが可能な図面一式を揃えて欲しいという依頼があり、その納期が3月31日でした。しかし、なんと、調査をしている最中の正月休みに急遽、解体工事が始まってしまいました。見るも無残な形で壊されました。あまりの悔しさで、いろいろ言うと思いが出て来てしまうのでこの辺で控えましょう。

図—8 柳壮一邸
 札幌市北4条西15丁目
 1925年7月3日上棟
 1971年取壊し



(a) 平面図



(b) 南東外観



(c) 取壊し前

図—8 柳壮一邸

柳壮一先生(注：北大医学部外科学教授)の住宅です。これは札幌でのヒンデルの最初の依頼住宅ですが、フレアードルーフになっています。ヒンデルはこの住宅を設計する時に、大学ノートに建築仕様書という、建てる時の約束事を手書きで書いています。(a) 平面図のように1階南側に食堂とサロンと仕事室、多分、奥さんの仕事部屋だと思いますが、それがずっと並んでいます。そして、二階に書斎等を兼ねた空間があります。当時としてはモダンな住宅だったことが分ります。

図—9 山崎春雄邸
北2条西23丁目
1925年11月15日上棟
1973年取壊し



(a) 南側外観



(b) ヒンデルデザインのアイヌ紋様
椅子 (山崎家蔵)

映画「リボンを結ぶ夫人」1939年の舞台となった
森田たま原作、山本薩夫監督、入江たか子主演

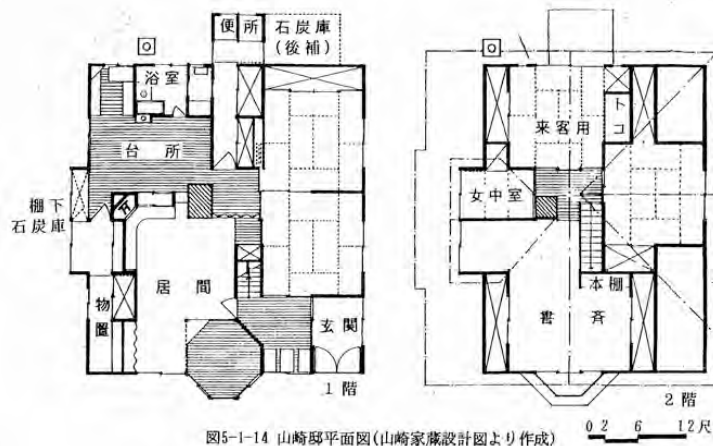
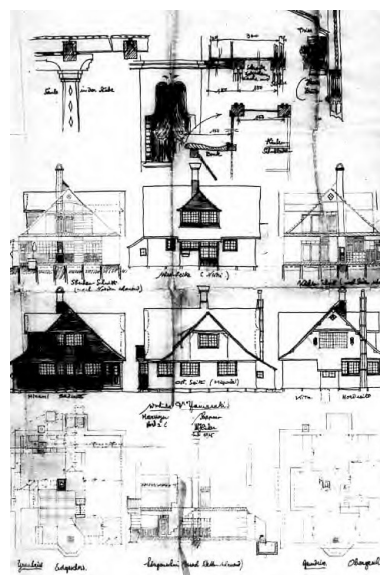


図5-1-14 山崎邸平面図(山崎家蔵設計図より作成) 0 2 6 12尺

(c) 平面図



(d) パラフィン紙に描かれた設計図
(山崎家蔵)

図—9 山崎春雄邸

図—9は、山崎先生のお宅です。北2条西23丁目にあります。多分、グブラーさんのお宅にも(b)のような椅子があると思いますが、椅子の背にヒンデルがデザインしたアイヌ模様の彫刻が描かれています。

設計図(d)は、以前山崎さんの家にあったもので、現在は所在不明になっているものです。パラフィン紙に書かれています。多分、この程度の図面で大工さんに指示して建てたのだらうと思われます。

山崎さんにいろいろお話を聞きましたら、この住宅を建てて 14 年後の 1939 年に「リボンを結ぶ夫人」という映画で、この住宅が舞台になったそうです。私は現在この映画を探していますが、なかなかみつかりません。映画自体があったことは記録に残っていますが、この映画の画像がどうも見つからないのです。それを見ると外壁がまだ真新しいシングル葺きの状況だった様子が良く分りますよということでした。

図—10 大野精七郎 1925 年
札幌市北 12 条東 2 丁目 1985 年取壊し



(a) 外観、外壁が鉄板葺



(b) 取壊し前の西側玄関（1982 年）

図—10 大野精七郎 1925 年

大野精七先生の御宅（注：北大医学部産婦人科教授）。こちらはシングル葺きではなく、鉄板葺きになっています。この住宅は、1985 年に取り壊されましたが、取り壊す前に建物の中までいろいろと調べさせていただきました。

図-11 聖フランシスコ修道院

北 11 条東 2 丁目

1925 年 11 月 19 日落成、1982 年 5 月取壊し



(a) 外観 (1977 年)



(b) 落成当時外観 (1925 年)



(c) 礼拝堂・祭壇(1925 年)

図-11 聖フランシスコ修道院

札幌市北 11 条東 2 丁目に聖フランシスコ修道院がありました。いま、カトリックの幼稚園になっていますが、その場所にあったのがこの修道院です。1982 年に取り壊されました。取り壊されるときに、実測調査だけは許していただきました。創建当時の図面を提供して欲しいと申し出たのですが、私が行く一週間前に燃やしてしまったと言われました。カトリックの方って、古いものをあまり大事にしませんね。

ここの教会だけでなく、他の教会でもそういうことがありました。

今回、レーゲンでいろいろ調べましたら、レーゲンでは亡くなった方のデータは教会にあります。ヒンデルは、実はカトリックではなくてプロテスタントでした。私は、ずっとカトリック教会で彼について調べてもらっていたのですが分らなくて、紹介されたプロテスタントの教会にお願いしたら、すぐに亡くなった日付など彼に関する事がすべて書かれた記録があり、コピーもいただきました。個人情報云々ありませんでした。

ヨーロッパで人物調査をするときは、教会が一番かも知れません。どこで洗礼を受けたか分らないと

難しいかもしれませんが、レーゲンというのは小さな町だったものですから、本当にどなたかに尋ねると、その日のうちに横のつながりをつけてくださいました。

あたかも私がやりとりしたみたいに言っていますが、私は全然ドイツ語がダメです。うちの準教授がたまたま小さい時にドイツで育ったために、ドイツ語ができるものですから一緒に行きました。最初のうちはドイツ語を全然思い出さなかったみたいですが、しゃべっているうちに、急にぺらぺらと思い出したかのようにしゃべり始めたので、通訳をしてもらいました。



図-12 奥田歯科診療所

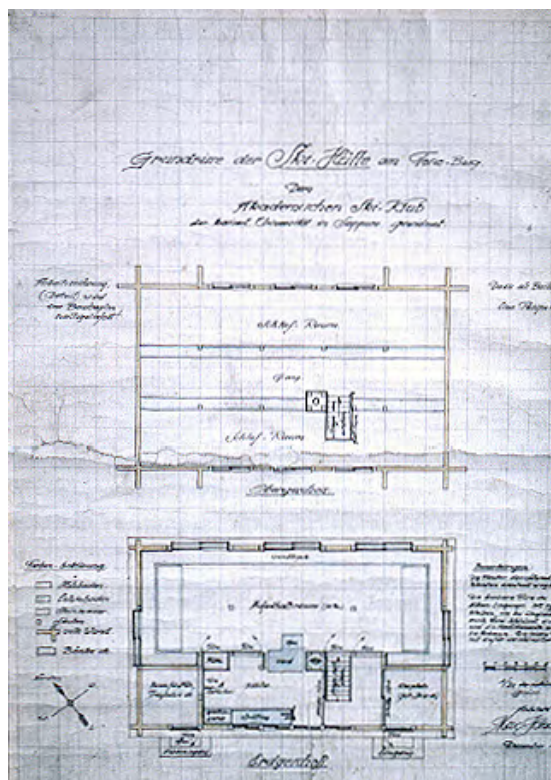
木造3階建の建物で、3階上部に4つのイオリア風柱頭飾りみせる。ヒンデルの建物は基本的にクラシックな作品が多いです。



(a) 1981年1月21日撮影

図—13 テイネパラダイスヒュッ
テ
1926年

北海道帝国大学文武会スキー部 15
周年記念事業で、1926年7月起工、
11月竣工



(b) 設計図 (札幌ウィンタースポーツミュージアム蔵)



(c) 1979.8.1 撮影



1階広間



2階

内部 (d)
1981.1.21 撮影



1階玄関ホール

図-13 テイネパラダイスヒュッテ

さて、ヒンデルの作品として次に挙げなくてはならないのが、北大のヒュッテ三部作です。手稲パラダイスヒュッテと、ヘルヴェチアヒュッテと、そして空沼小屋。

空沼小屋というのは、もともとできた時は秩父宮様の小屋ということで、秩父宮殿下ヒュッテと言われていました。パラダイスヒュッテ (a) は 1926 年に建設されましたが、札幌ウィンタースポーツミュージアムにヒンデルの図面(b)が残されています。実はパラダイスヒュッテは保存運動をやっているうちに自然に倒壊してしまいまして、その後に新しいパラダイスヒュッテ (図-14) ができています。新しいヒュッテは、この図面に忠実に作られています。ただし、この図面では現行の建築基準法に適合しないということで、設計は山本幹雄さん、この私の北大の大先輩にヒンデルと同じように無報酬で設計をしていただきました。

(c) は 1979 年に撮影したまだ倒壊する前の、すでに閉鎖されている時の状態です。最後の図面化をしようとして行った時の写真です。

図-14 手稲パラダイスヒュッテ

1978 年閉鎖、1994 年倒壊解体、同年 12 月「手稲パラダイスヒュッテ」竣工



図-14 手稲パラダイスヒュッテ

図-14 が 1994 年に倒壊したあとに建てられた新生パラダイスヒュッテです。実は北大は山小屋はこの 1 棟があればいいんじゃないの？と非常に乱暴なことを言っています。私は北大にとってヒュッテは財産、たくさんあることが大事だと言っています。それはやはり、学生諸君を北大に取り込む時の宣伝になっても良いと思うし、空沼小屋なんかはやはり宮様からいただいたものですから、そういう意味ではもっと北大の特質として認識したほうが良いと思います。

図—15 北星学園百年記念館（旧北星学園女教師館）

札幌市南5条西17丁目

昭和元（1926）年竣工、平成元（1981）年改修

設計：M. ヒンデル、施工：松川・三浦工務所、木造3階



(a) 改修後（1991年）



(b) 改修前(1980年)



(c) 竣工時西側外観



(d) 改修後（現百年記念館）



(e) 居間・食堂

図一15 北星学園百年記念館（旧北星学園女教師館）

ヒンデルはカトリックの仕事が多かったのですが、いくつかプロテスタントの仕事がありました。北星学園の百年記念館。これはもともと女教師館として造られたものです。現在は改修されています（a、d）が、私が調査に行った時は、（b）のようにぼろぼろの状態でした。当初は学園としてはこれを壊してしまおうという考えだったのですが、理事会でこの建物の価値を語る時間をいただきましてお話ししたら、なんと即決で残そうと言ってくださいました。現在は同窓会が管理をしています。

図一16 ジュネーブ国際連盟会館 案（1926） ル・コルビジュ案でも有名



(a) ヒンデル案透視図



(b) ヒンデル案配置図



(c) ヒンデル（後列左端）と手伝いの北大生たち

図一16 国際連盟会館案（1926年）

1926年にコルビジェという有名な建築家もエントリーしたジュネーブ国際連盟会館の建築設計国際コンペがありました。落選しましたが、北海道からヒンデルが応募しています。

(c)の後列左端にいるのがヒンデル。当時はまだ彼の事務所に所員がいなかったようで、これには北大の工学部、農学部などの学生たちがお手伝いしたようです。後ろの壁にスケッチ、机の上に模型が置かれています。ただ、ごらんのようにものすごくクラシックな作品で、ちょっとこれでは落ちるかなという気もしますが、そのとおりの落選でした。でも、非常にダイレクトに世界平和を訴えていて、頂部で人像が手をつないでいるという非常にシンプルなデザインになっています。

図-17 ヘルヴェチアヒュッテ



(a) 1994年撮影

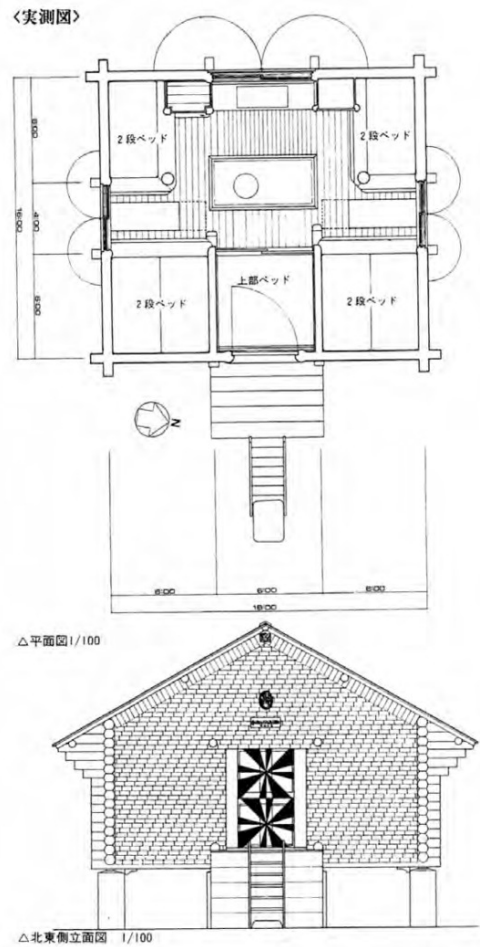
1927年5月着工

9月13日竣工

大工：水本小判次、途中から田頭も雇用

1934年 北大に寄贈

1985年8月 改修



(b) 実測図(角研究室)



(c) 1994年撮影



(d) ヒュッテ内部

図-17 ヘルヴェチアヒュッテ

さて、85周年を迎えたヘルヴェチアヒュッテですが、さきほど話があったように1985年に改修されて非常にきれいになっています。1927年の9月に竣工しましたが、もともとは山崎さんとグブラーさんとヒンデルさんの三人の所有物でした。

実はヒンデルは、この作品にすごく思い入れがあって、自分は王宮を建てたよりも非常にうれしいということで、日本での最後、ヨーロッパに帰る前にわざわざヘルヴェチアヒュッテを訪れて、それからヨーロッパに帰っていったのです（図-31参照）。

ヒンデルの設計図面がなかったので、うちの研究室で実測調査をしました（b）。ログキャビンの外側に、こういうふうにシングル葺きをしています（b正面図）。中も実際に写真を撮ってみると、すごく良いのです（d）。こぢんまりとしています、もともと自分たちが楽しもうというインテリアですから、そういう意味では現在も良い雰囲気で作られていると思います。

図-18 空沼小屋（秩父宮殿下ヒュッテ）

1928年12月10日竣工



(a)南側外観

秩父宮様北海道視察

1928.20 上野駅発

2.21 函館から札幌 札幌三井別邸宿泊

2.22 AM. 札幌神社、北海道庁、北大、
植物園縦覧
PM. 北大スキー部競技大会（三角山）縦覧

2.24 手稲山スキー登山を北大スキー部員と堪能し、パラダイスヒュッテに宿泊。

2.25 ヘルヴェチアヒュッテ宿泊

ヒュッテ候補地選定並びに平面作成→大野博士へ

平面作成をヒンデルへ

8月初旬 大野スキー部長宮家訪問

8.25 宮家から建設決定が電報で通知
(8.28書面による工事依頼)

9.10 ヒンデル来札



(b)北側外観

図一18 空沼小屋（秩父宮殿下ヒュッテ）

秩父宮様が 1928 年に来道されて、パラダイスヒュッテとヘルヴェチアヒュッテを御覧になりました。実は当時、札幌ではツアースキーのコースを作ろう、そして、そのコースの途中途中にヒュッテを作っていこうという計画があったのです。それが実現すれば札幌は、ウィンタースポーツのメッカになったと思います。

パラダイスとヘルヴェチアヒュッテに秩父宮様が泊まれて、こういう小屋を自分も欲しいとおっしゃって、大野精七先生に候補地の選定と平面図を作るように話されて、そしてヒンデルが基本設計をします。そして、実施設計は北大で受け入れてやりました。図面等も残っていて、設計は当時農学部を設計した萩原惇正さん、原源太郎とか村井栄吉らです。請負は伊藤亀太郎、伊藤組です。伊藤組の力がなかったら、この建物は建ちませんでした。

実は重要なのは命名した人です。空沼小屋と命名したのは高松宮様です。秩父宮様が作り、高松宮様が命名したものを、1947 年に宮家から北大に寄贈されていますから、これはもう北大の宝物だと思うのです。ところが今の北大は、壊れるのを待っている状態。それで、今日出席されている安間さんたちと一緒に、じゃあ、北大当局が保存というまで、最後まで頑張ろうということで色々と手段を考えています。どうしても下回りが腐って傾いて来ていますので、ジャッキアップをしました。それからいま、倒壊の危険があるということで使用中止になっています。そういうこともあって、今後この建物をどういう形で次の世代につなげていくかという事を考えるのは大学の責任でもあるし、ここに出席しておられる皆様方のお力も必要です。ぜひなんとか、北大の宝として次世代につなげていきたいとの思いです。



(c)北側下屋



(d)雨戸詳細

ヒンデルの原案図を基に、
北大営繕課長萩原惇正、雇村井栄吉、雇原源太郎らが製図。監理は原源太郎
請負：伊藤亀太郎、監督・井上亀之助
10. 17 地鎮祭 11. 26 上棟式
1929. 1. 22～25 高松宮宿泊 24 日空沼小屋
Soranumakoya と命名
1930. 2011 一般開放
1947. 2. 17 北大に寄贈

図—19 天使の聖母トラピスチヌス修道院 1927



明治末期に建設された本館は、1925年10月16日、原因不明の出火で被災。
聖堂・司祭館は残る。
消失前の姿をほぼ踏襲して復原。1927年竣工

図—19 天使の聖母トラピスチヌス修道院

湯の川にありますトラピスチヌス修道院。この建物は明治年間に建てられたのですが、1925年に被災します。本館は焼失しましたが、隣にある聖堂部分は残ったので、昔とほぼ同じ形で本館をリノベーション、復元しましたが、その時にヒンデル事務所が関わっています。当時はすでに横浜に事務所がありました。

図—20 新潟カトリック教会堂



(a) 教会正面 (1982年)

1927年9月18日献堂式



(b) 教会聖堂内陣(1982年)



(c) 聖堂絵葉書 (ハンス・ヒンデル氏提供)



(d) 壁に投影されたステンドグラス

図-20 新潟カトリック教会堂

新潟のカトリック教会が1927年に建設されました。これは現存していますし、大変きれいな姿で今でも使われています。ヒンデルはこの建物ができた前後に横浜に移ったようで、聖堂絵葉書に「マックス ヒンデル建築設計（横浜・札幌）」と書かれています。



(a) 創建時の寄宿舍(北側)



(b) 創建時の寄宿舍(南側)



(c) 寄宿舍(南東側)

図-21 藤学園寄宿舍 札幌市北16条西3丁目 1927年10月1日～1963年

図-21 藤学園寄宿舍

1927年に藤学園寄宿舍が作られています。

実は藤学園の女子学生が、先日、ヒンデルの藤学園校舎の図面を、国立公文書館で見つけてきました。なんと、大谷学園と書かれた封筒の中にありました。どうも、大谷学園の封筒を再利用したみたいですが、一度も開けられていないようでした。私もはじめてヒンデルの藤学園の設計図を見ました。寄宿舍については、これからまだ調べると彼女は言っています。

図—22 横浜市本牧満坂自邸

1927年10月移転



(a) 竣工間もないヒンデル邸
人物はヒンデル



b) 旧ヒンデル邸南東側外観



(c) 旧ヒンデル邸東側外観



(d) 小屋裏 (照明のバランスウェイトの玉石が見える)



(e) 居間



(f) 居間天井隅部

図一22 横浜市本牧満坂自邸

これが横浜に移転した事務所の現存する建物。(a)に若干ふくよかになっているヒンデルが写っています。

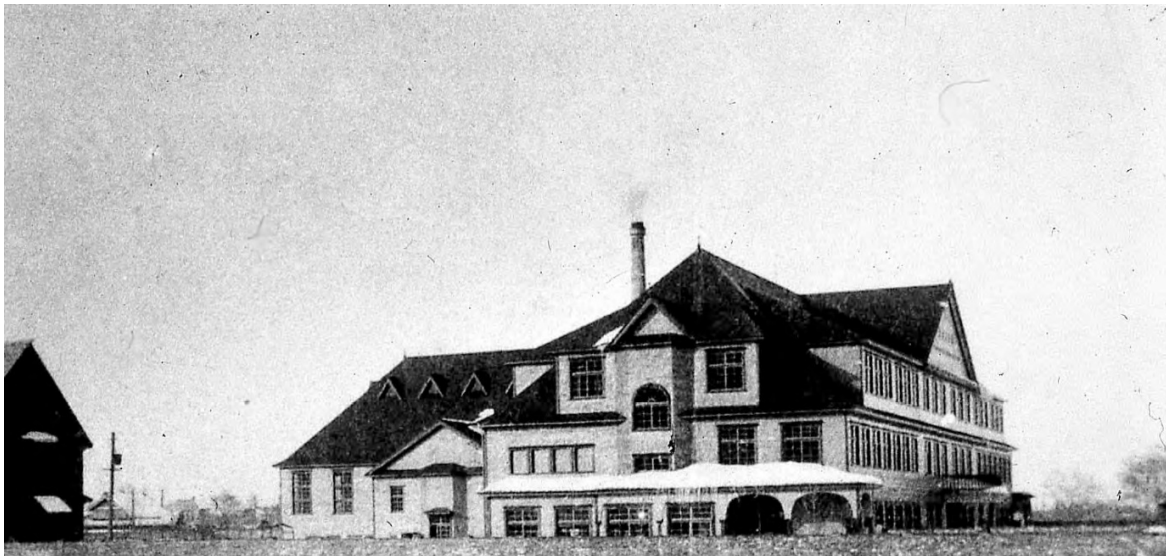
今から15年くらい前にこのお宅にうかがって、非常にガードの固いお宅だったのですが、なんとか写真を撮らせていただきました。建物はちょっと、フレアドルーフ的な感じがあります。外壁は全部取替えられていました。応接間の上がなかなかおしゃれです。(f)は居間の隅の部分。天井裏に裸電球があるのですが、それが光天井になってすごくきれいです。ウェイトがなんと玉石で、普通の石を使ったウェイトになっていて、電球を上げたり下げたり、それで光の調整ができるようになっています。初めて行った人様の家で、屋根裏まで拝見させていただいて調査して来ました。

(d)に見えるひもの先に石がぶら下がっていて重しになっていて、これが裸電球につながっていて、高さをコントロールするようになっています。

図一23 北星女学校校舎

1929年～1963年焼失

1929.5.28 起工式、 8.14 上棟式、12.2 工事終了



創建時の校舎(1929年)

図一23 北星女学校校舎

1929年建設の北星女学校校舎もヒンデルの設計。

図—24 金沢聖霊修道院三位一体聖堂
1931年11月12日献堂式



(a) 聖堂内陣



(b) 外観

図—24 金沢聖霊修道院三位一体聖堂

金沢にヒンデル設計の聖霊修道院三位一体聖堂というのがあります。これは金沢に建っているということもあって、木造の円柱に漆を塗っています。そういった地域の特質みたいなものも、かなり意識してデザインする人だったのですね。

ごらんのように建物自体は一言でいえば、ロマネスクの様式をそのまま踏襲しているというふうに言えます。

図—25 南山中学校本館 1932年2月28日



図—25 南山中学校本館

名古屋にあります南山中学校の本館です。私が調査に行った10年ほど前にはまだ現存していましたが、現在はどうなっているでしょう。これは鉄筋コンクリート造の建物です。

図—26 聖母病院
1931年
東京都新宿区中落合 2-5



(a) 病院正面 (聖母病院 50年の歩み)



(b) 階段室塔屋の釣鐘型屋根



(c) 病院正面(1992年)

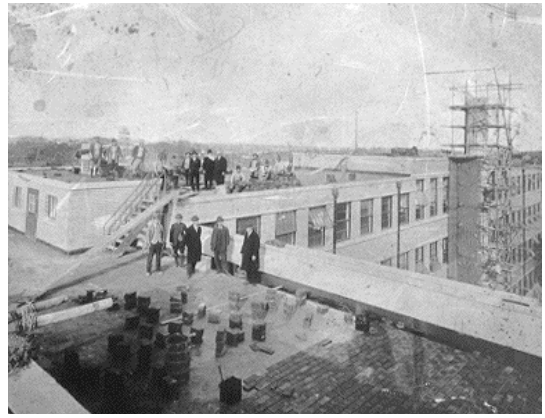
図—26 聖母病院

現在もありますが、新宿の中落合に聖母病院というのが現在もありますが、これもヒンデルの作品です。

図-27 上智大学 1932年竣工



(a)現 3号館(1992年)



(c)屋上工事中(川喜多敬徳蔵)



(b)創建時の校舎(1932年)



(d)廊下(1992年)

図-27 上智大学

それから、1932年にできた上智大学の大学院の校舎として使っている、確か3号館といっている校舎で、これもヒンデルの作品です。ちょうど、屋上の防水をやっている最中の写真が一枚(c)手に入りました。この上智大学の仕事は、彼の中では大きな仕事だったと思います。



(a) 外観 (1991年)



(b) 教会内部(1991年)

図-28 三本木天主公教会
(十和田カトリック教会)
1932年



(c) 教会内部(1991年)

図-28 三本木天主公教会

十和田の三本木天主公教会。木造ですが、これも図面が残っていて、ヒンデルの作品だということが分っています。

図—29 宇都宮天主公教会 1932年



(a) 正面外観 (1979年撮影)



(b) 聖堂側面



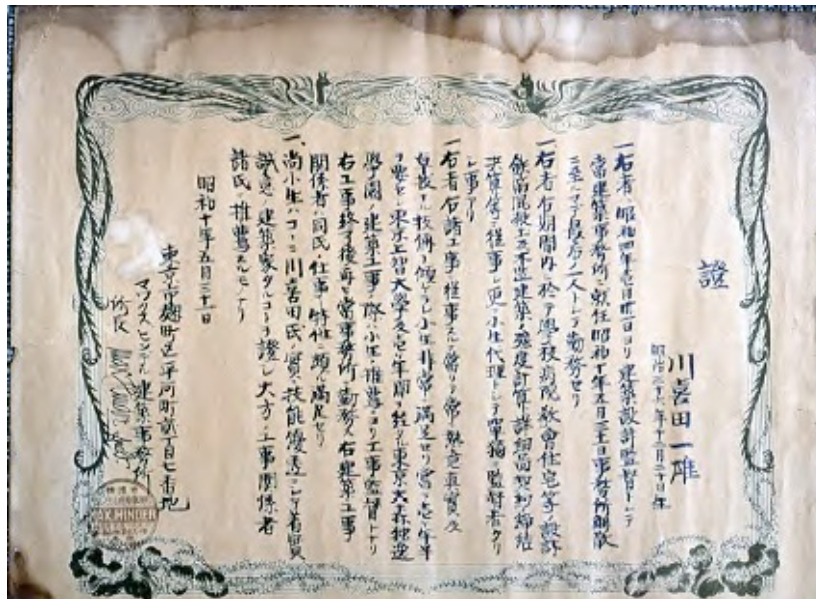
(c) 内陣

図—29 宇都宮天主公教会

ヒンデルの教会建築の中で代表的なのは、宇都宮にある宇都宮天主公教会です。これは鉄筋コンクリートの外側に大谷石が張ってあります。大谷石は、フランク・ロイド・ライトの帝国ホテルが有名ですが、現在は明治村に移っていますので、大谷石を使用した現役の一番大きな建物はこの教会になると思います。

外側は、ドイツのシュパイアー大聖堂によく似ています。シュパイアーを意識したような感じがあるのですが、ちょっと後ろが短いですね (b)。敷地に合せて設計したものと考えられます。

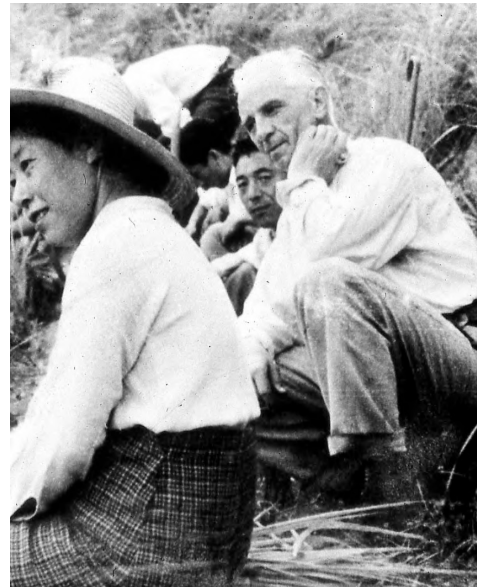
図—30 ヒンデル事務所の証



図—30 ヒンデル事務所の証

横浜の事務所の所員で川喜田一雄さんという方がいました。事務所を閉鎖するときこの人はどういう仕事をしたかということをきちんと記録して、承認印を押して、再就職する時に困らないように保証して事務所を解散しています。これはなかなかできることではないと思いますが、そういう意味ではヒンデルの優しさが出ています。

図—31 離日（1939年）前のヒンデル



図—31 離日（1939年）前のヒンデル

1939年にヨーロッパに帰る前にヘルヴェチアヒュッテを訪問した時の写真です。今朝みてきたDVDの作品もこの顔でした。すごく優しい発声の方です。

図—32 Regen



(a)レーゲンの街並み(2009年撮影)



(b) 共同墓地正門



(c) ヒンデル墓碑 (奥の白い石)

Regen の Alter Friedhof(旧墓地)に眠る

墓碑 「M. R. HINDER

20. 1. 1887 27. 1. 1963」

「GRETE HINDER

5. 7. 1908 23. 9. 2003」



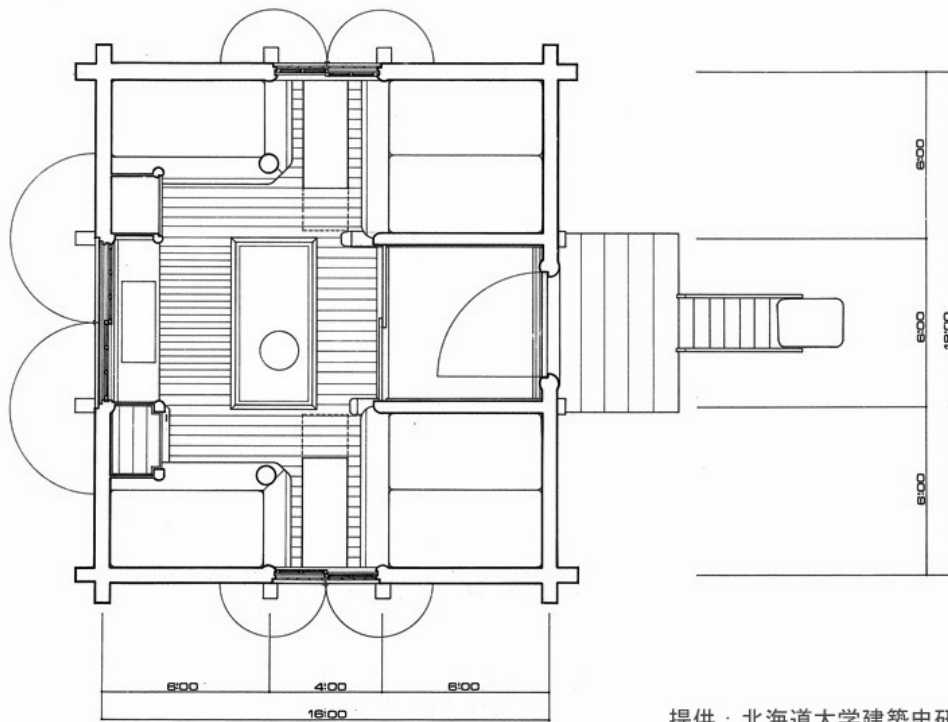
(d) 旧墓碑 (1984年10月)

図－32 Regen

レーゲンというのは小さな町です。チェコとの国境に近くて、レーゲンスブルクから車で一時間くらいのところですが、こういう場所でヒンデルがいま眠っているということですね。1984年に行ったときには、木造の墓碑（d）でしたが、現在は立派なお墓です（c）。調査を始めてから随分たっていて、他の仕事をしながら調査していてなかなか進まなかったのですが、レーゲンでは、私の研究成果の1部が引用され、郷土史の中にもヒンデルの名前がきちんと書かれるようになりました。

まだ調べることはいろいろありますが、ヒンデルという人がどういう人か、ものすごく大雑把に説明させていただきました。

ありがとうございました。



提供：北海道大学建築史研究室

あとがき

北大山岳館は、一昨年より一般向けの講演会を春と秋に開催し、講演集を作成してきた。しかし、北大山の会が4月27～29日のベルンハルト・グブラー夫妻の来道に合わせて、「ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年」記念行事を開催することとなり、山岳館がその幹事を努めたために今年春の講演会を開催する時間的余裕がなかった。そのためこれに代わるものとして、記念行事の祝賀会で行われた角先生の講演「建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ」を講演集に編集することにした。

角先生の熱のこもった講演は、参加者に大変好評で、建築に素人でも楽しく理解でき、スライドを多く使っておられたためにこの講演集もスムーズに編集することができた。角先生には無報酬で講演をしていただいたり、講演集の編集では2度にわたり校正をお願いしたりとご迷惑をおかけした。先生には心より感謝を申し上げます。

録音テープの起しは、樋口和生会員の令夫人文恵さんをお願いした。文恵さんには報酬をお払いしたいとお話したが、山小屋のためにお使いくださいとお申し出いただき、ありがたくお受けした。
ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年記念行事の幹事は、昨年12月から記念誌の編集、会員への各種案内、寄附のお願い、記念誌の発送、祝賀会の準備などにあたった。幹事にとっては気忙しい数ヶ月であったが、さいわい、全てがスムーズに運営され、会員には十分に満足してもらえる行事になったと思う。ご協力いただいた幹事諸兄にあらためて厚く感謝申し上げます。

本講演集並びに八十五周年記念誌が部員・会員を含む多くの人に読まれることを願っている。同時に若者達にヒュッテンレーベン楽しさを教えようと、私費でヘルヴェチアヒュッテを建設した山崎春雄、アーノルド・グブラー、マックス・ヒンデルの3氏に想いをいたしながら、ヒュッテが末永く健全に維持されていくことを願う。

北大山岳館運営委員会委員長
中村晴彦

講演集「建築家マックス・ヒンデル
とヘルヴェチアヒュッテ」

非売品

平成24年6月20日

発行 北大山岳館

編集 中村晴彦



北大山岳館

〒060-0018 札幌市北区北18条西13丁目 北大サークル会館内

☎716-2111(内線5138) 携帯090-6870-5120

E-Mail: sangakukan@aach.ees.hokudai.ac.jp

URL: <http://aach.ees.hokudai.ac.jp/sangakukan/>